
177話 比較 Ver.2

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

177話 比較 Ver.2

【NZコード】

N0186Z

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

凍りつくほど寒い日、一人暮らしのオレのマンションの部屋には、なぜか明かりがついていた。実験的な意味合いのSSです。

足の先から頭のてっぺんまで凍りつくほど寒い中、やっと外まわりの営業を終えたオレは残業もそこそこに帰宅の途についた。

一刻も早く熱い風呂に入つて冷えた体を温めたい。でないと、冷凍マグロとして出荷されてもおかしくない状態だ。

一人暮らしのオレは、マンション近くのコンビニに立ち寄つてアルミホイルの皿が付いた一人用の鍋焼きうどんを手にとった。

マンションにつくと、なぜかオレの部屋には明かりがついて、料理を作る音まで聞こえてくる。

「チツ……またあいつか」

舌打ちしながらきなりドアを開けると、中にいた女がオレを見て固まってやがった。

「どうして……こんなに早く」

「今日はあんまり寒かったから、仕事を切り上げて帰ってきたんだ」答えるながら女の手もとを見ると、できたばかりの鍋から美味そうな香りと湯気があがっている。

「あ、これ、トリ鍋。体が温まる材料も、たくさん入れてあるから

……」

「分かった。とにかく体が冷え切つてるから風呂に入つてくれる。先に食つてろ」「うう

そう言つてやると、よほど意外だったんだろう。女は驚いてオレを見た。

とにかくせつとき置いた鍋焼きうどんを冷蔵庫へ押しこんで、風呂を沸かし、熱い湯に肩までドップリつかるとようやくひと心地ついた。

部屋着に着替えて女のいぬといろへ戻ると、食器を用意したまま鍋には手をつけずに座つて待つていた。

「先に食つてろつて言つたわ」

「だけじ、せつかくあなたと一緒に……」

「毒でも入れられてたらたまらないからな」

「ヒドイ。わたしがそんなことすると恥づの~」

「思つ。だから先に食え」

冷たく言つてやると、女は笑いながら煮えた具を自分の皿にすべつて食べはじめる。

どうやら大丈夫のようなので、オレもひと口食つてみると案外うまい。

「おいしい？」

「まあまあだな」

それから女は具材のこだわりが何とか、趣味がどうとか、最近身の回りで起きたこととかを一方的にしゃべり続けた。

「それはやつと……」

体も充分温まり腹も一杯になつたといひで、オレは女に尋ねる。

「おまえは誰だ？」

一ヤリと笑う女を今すぐ口を出さうかと思ったが、今日の寒さは異常だ。

明日の朝、玄関前で冷たくなつていられると夢見が悪い。

オレのこと何もかも知っているという女から名前と住所、携帯番号を聞きだして鍋の礼を言い、普通に会うなら改めて会ってやると約束すると、呼んでやたタクシーで渋々ながら帰つていった。

まったくよけいな時間を取られた。オレも体が冷えないよう厚着をして出かけなければ。

今夜もあの子があびえて待つてくれてこるところだ。

(後書き)

オチだけ変えて正反対の内容にしてみよう、とこいつ実験でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0186z/>

177話 比較 Ver.2

2011年11月30日22時48分発行